（様式１－１）

庭園間交流連携促進計画（周遊部門）

わかやま庭園文化と歴史回遊

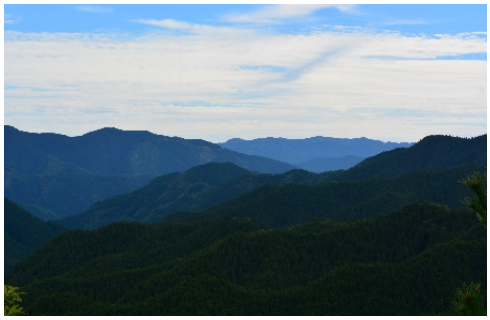
～ 紀州徳川家の城下町から高野山へ 紀の川の恵みを感じる旅 ～

２０２２（令和４）年２月

和歌山県ガーデンツーリズム推進協議会

取組の将来像（ビジョン）

古からいくつもの都が置かれ、日本固有の多様な文化と歴史を継承し、創造してきた関西圏。豊かで多彩な自然・風土の中で暮らしてきた先人たちが築いてきた魅力ある有形無形の文化は、現代においても国内外から訪れる多くの人々に日本の原風景と多様な現代文化を体験する機会を提供している。



高野山女人道・ろくろ峠

現在の和歌山県北部地域に位置する、万葉の時代から海を臨む景勝地であった和歌の浦、聖地巡礼地としての高野山や粉河寺、学山として発展した根來寺は、いずれも旧都である奈良や京都からの近接性もあり、古から人々にとって旅の目的地であった。今日においても、こうした歴史的背景を有する和歌山県北部地域は、関西圏という広域での周遊観光の目的地として大きな可能性を見出すことができる。

本計画では、こうした中でもこれまで観光資源としてはあまり注目されてこなかったともいえる庭園の隠れた魅力に大きくスポットを当てる。庭園を鑑賞するのみでなく、豊かで多彩な歴史・食文化や文化体験プログラムをも組み合わせて、これら地域に対する理解をより一層深めてもらうとともに、広域圏並びにそれぞれの地域における構成庭園をハブとした周遊観光の促進を目指す。

根來寺庭園

【交流人口の拡大・滞在時間の増加】

庭園を中心とした魅力的な周遊観光を提案することにより、地域に対する理解を深めてもらいつつ、交流人口の拡大と滞在時間の増加を目指す。

【地域に対する理解と地域の意識向上】

交流人口と滞在時間の増加に伴って、国内外からの地域に対する理解がより一層深まるとともに、地域住民が自分達の歴史的・文化的風土に対してこれまで以上に誇りを持ち、更に積極的に地域の課題と活性化に意識を向けるようになることを相乗効果として期待する。

【事業展開】

これら本計画の将来像の実現するために、多言語による公式ウェブサイトやメディアを通じた国内外への情報発信、食文化や各種文化体験プログラムを取り入れた周遊観光ルートの国内外のメディア・旅行会社への提案、構成庭園や地元関係者等と連携したイベント開催などを展開していく。

番所庭園

【構成庭園の位置図】

【構成庭園】

①養翠園

②番所庭園

③和歌山城西之丸庭園

④根來寺庭園

⑤粉河寺庭園

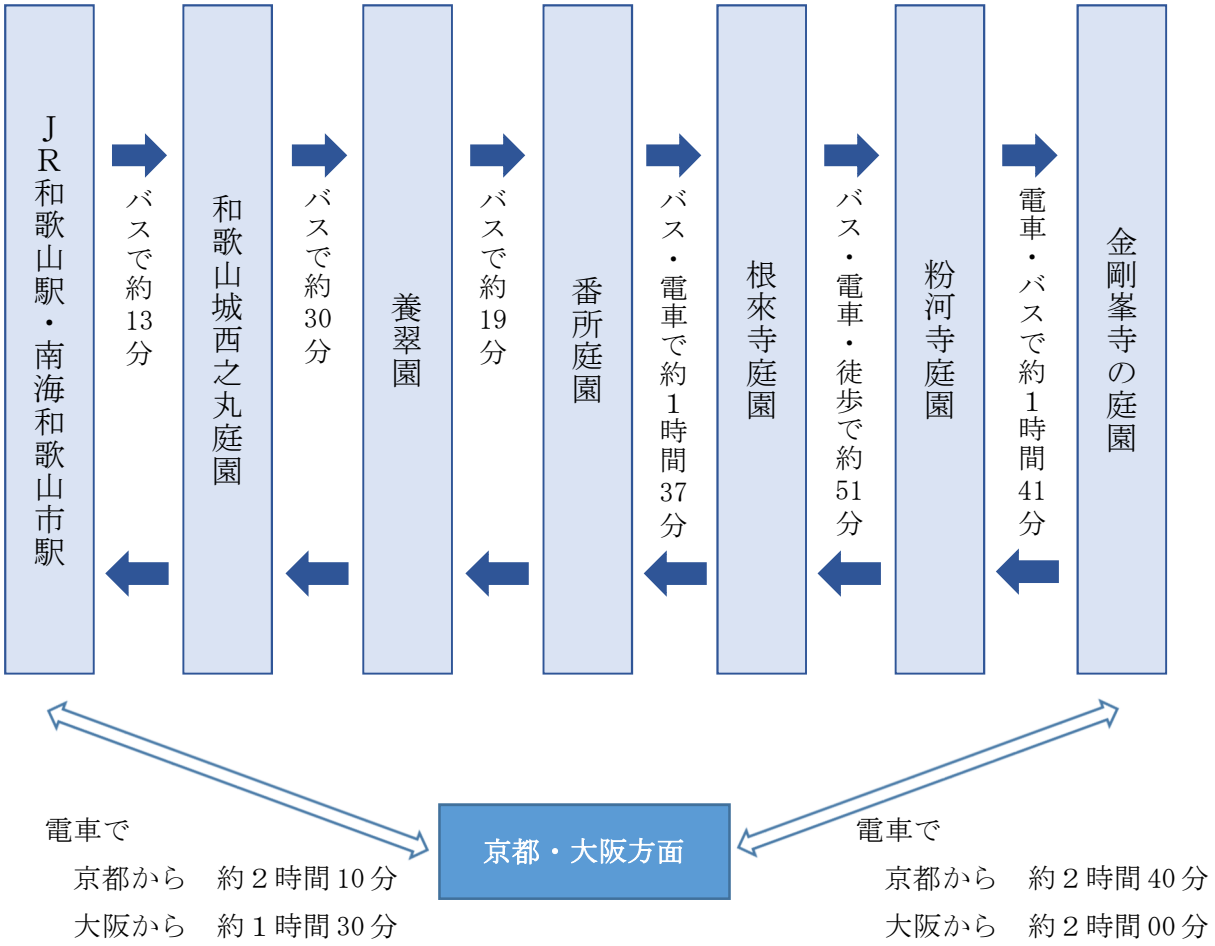
⑥金剛峯寺の庭園

【取組全体の範囲】

【良好なアクセス】

現代においても、隣接する大阪をはじめ京都や神戸など関西圏の大都市や関西国際空港との間で公共交通機関や自動車を使ったアクセスも良好であり、京都や奈良とを結ぶ京奈和自動車道の整備により多方面からの交通インフラが整いつつある。

【交通案内】庭園間の移動（例）



計画のテーマ

古くから紀の川の恵みを受けて育まれてきた「紀州徳川家ゆかりの庭園」及び「高野山の庭園」を中心に地域の歴史・文化を楽しみながら巡る周遊観光を提案する

１．紀の川の恵み

紀の川は、奈良県と三重県の県境にある大台ケ原を水源とし、和歌山県北部を横断して紀伊水道へと注ぐ、流程約 135km に及ぶ長流である。八葉蓮華に例えられる峰々に囲まれた高野山が位置する山間部には、和歌山が「木の国」ともいわれる所以となった豊かな森が広がる。

古代においては紀の川の水の利用は限定的であったようだが、中世以降は人口の増加により本格的な灌漑の必要性が高まった。江戸期には城下町の発展による人口増加及び洪水への対策として、初代藩主徳川頼宣の時代から大規模な治水工事が盛んにおこなわれ、第５代藩主徳川吉宗の時代には約 1,000ha もの田畑が潤ったといわれる。先人たちが苦労の末に築いた用水路から引かれた水の恵みを受けて、今日では果樹栽培に適した土地が形成され、多種多様な果樹の園地が広がる。

また、紀の川は古くから水運に利用され、特に奈良盆地と和歌山平野を結ぶ交通路としても重要な役割を果たしてきた。江戸期には、和歌山城下から約 50km 上流にある要衝・橋本へ川上船が行き来した。橋本で荷揚げされた積荷は陸路で高野山に運ばれ、また、高野の木材は筏に組まれて紀の川の河口まで運ばれた。和歌山城下は川船で運ばれてくる多種多様な物資によって繁栄した。

このように、紀の川は、地域に恵みをもたらすことで人々の生活を支え、さらに豊かで多彩な文化を育む素地を形成してきた。

２．和歌の浦と紀州徳川家の城下町における庭園文化

かつて紀の川の主流は現在の和歌川を流れ、和歌の浦に注いでいた。飛鳥・奈良時代には、紀の川河口域には多くの島々や中州があり、内陸部にあった都の皇族・貴族にとっては海洋リゾート地ともいえる景観が形成され、紀の川流域は目的地へと至る周遊観光ルートとして、多くの旅人が往来していた。

妹背山から干潟を望む

その風光明媚な景色や和歌の浦に至って初めて見る海に臨んでの感動を記憶に留めるとともに都の家族や友人に伝えるために、山部赤人や柿本人麻呂らの宮廷歌人や多くの都人によって数多くの万葉歌が詠まれた。この地の眺めに感動した聖武天皇により、景観保全の詔を出されたという事実は、持続可能な観光が重要視される今日においても意義深い出来事である。

若の浦に 潮満ちくれば 潟をなみ 葦辺をさして 鶴鳴きわたる　山部赤人

和歌の浦は、単なる景勝地にはとどまらない。和歌の神様を祀り、小野小町をはじめ多くの歌人に崇拝されてきた玉津島神社があり、和歌の浦は「和歌の聖地」としてあがめられてきた。玉津島神社は、唯一その名を持つ「日本一社」であり、他地域にはない特別な場所である。菅原道真を祀り、大宰府天満宮、北野天満宮とともに日本の三菅廟といわれる和歌浦天満宮の存在により、「学問の聖地」としての顔も持つ。

和歌の浦の夕焼け

そうした歴史的・文化的な背景から、紀州徳川家は、徳川家康と初代藩主頼宣を祀る紀州東照宮や観海閣などを整備し、「紀州徳川家の聖地」ともいえる和歌の浦の景観保全に努めた。その根底にある万葉の時代への憧れもあって、歴代藩主により和歌の浦の周辺地域に養翠園などの庭園や施設が造営された。現代においても、かつて紀州藩の遠見番所が設置されていた「番所の鼻」に、万葉人も眺めたであろう海の風景を臨む番所庭園が造営されている。

養翠園

青い海を抱くように伸びた砂嘴、潮が引くと姿を現す干潟、常緑の松が織りなす和歌浦の風景は、さながら自然が作り上げた庭園のようである。玉津島神社や和歌浦天満宮、紀州東照宮などが、万葉歌に詠われた干潟や美しい島々が連なる海の情景とともに、風情のある景観を形成していることから、有形無形の文化財群が評価され、「絶景の宝庫 和歌の浦」として日本遺産にも認定されている。

番所庭園

紀州徳川家の居城であった和歌山城は、紀の川河口部近くの虎伏山（とらふすやま）に設けられている。小高い山自体が結晶片岩の岩盤から成り、紀の川とつながる水路や内・外堀には荷を積む船が往来していた。現在は外堀の大部分が埋め立てられたが、歴代藩主が数寄を楽しんだといわれる和歌山城西之丸には、内堀を池に見立て趣向を凝らした和歌山城西之丸庭園が残されており、当時の大名庭園や城郭内庭園の様態を知る上で貴重な価値を有するものとして名勝にも指定されている。

《紀州青石》

この地域を代表する庭石として結晶片岩の一種である「紀州青石」の存在がある。緑泥片岩とも呼ばれ、東は三重県から西は愛媛県に至る中央構造線沿いが産地で、それぞれの地方で伊勢青石、阿波青石、伊予青石などとブランド化されている。

古来、紀州青石は、庭石としてだけでなく、石垣や石畳、門柱、石碑などに広く用いられてきたことが特徴として挙げられる。本計画を構成する和歌山城西之丸庭園、養翠園、番所庭園、根來寺庭園、粉河寺庭園、高野山の庭園など地域を代表する庭園をはじめ一般の民家や公共施設などにも広く使用されている。

和歌山県北部では、かつての城内であり、現代の城郭に隣接する岡公園に天守閣や城内の庭園に用いるために青石を切り出した石切場跡や大きな露頭が残り、番所庭園の位置する番所の鼻や周辺の海岸にも露頭がみられる。

３．紀の川中流域における紀州徳川家ゆかりの寺院の庭園文化

紀の川に沿って東に進んだ中流域には、日本で唯一国宝に指定されている木造大塔で知られる一乗山「根來寺」と西国三十三所霊場の第三番札所として信仰を集める風猛山「粉河寺」が位置する。

新義真言宗の総本山である根來寺は、修行僧に学問を授ける伝法会の復興運動を推し進めた興教大師・覚鑁により鎌倉時代に創建され、かつては大宗教都市として繁栄した。また、西国三十三所霊場第三番札所・粉河寺は、奈良時代末期に創建され、厄除け観音として信仰を集めてきた。

中世に繁栄を迎えた根來寺と粉河寺は、戦国期の戦火により一度は荒廃したものの、紀州徳川家の庇護を受けて再興し、境内にはゆかりの庭園が残されている。根來寺庭園は、当時の特色ある手法をよく残し、開創以来の遺構としても貴重なものとして、粉河寺庭園は、独創的な形態から他の定型的作庭には見られない魅力に満ちているとして、いずれも名勝に指定されている。

根來寺庭園

粉河寺庭園

このあたりの紀の川の川辺には奇岩が点在し、紀州富士の名で知られる龍門山を望む風光明媚な景勝地として親しまれてきた。初代藩主頼宣が、現在の岩出市にあたる川辺に別荘として巌出御殿を整備し、歴代藩主による参勤交代の際にも利用されてきた。巌出御殿は、宝暦 14 年（1764）に解体されたが、三渓園（横浜市）に臨春閣（重要文化財）として当時の姿を残している。

また、粉河寺の境内には、平安時代に創建され、紀州徳川家の援助を受けて復興した

十禅律院があり、和泉葛城山を中心とした和泉山脈を借景とする枯山水「洗心庭」が残されている。

４．高野山の庭園文化

紀伊山地の山並み

弘仁７年（816 年）に弘法大師空海により真言密教の修行の場として開創されて以来、全国から信仰を集めてきた高野山は、紀の川上流の山間部に位置する。高野山は修行の場であることから、生活物資は山麓の紀の川周辺にある荘園や周辺の村々から運ばれていた。参拝客は紀の川北岸に位置する高野口などの宿場町から、紀の川を渡って、高野山麓から延びる高野山町石道などの参道を登って高野山に至った。

山内にみられる墓碑・供養塔に使われた多くの巨石も、遠く神戸の御影や大阪府南部の和泉地方などから紀の川の水運を利用して高野山麓の物流の拠点であった慈尊院に運び込まれていた。慈尊院の境内には、船からの荷揚げに失敗したのか、後世に紀の川底から引き揚げられた江戸期の大型の五輪塔なども設置されている。高野山は人の往来や物流の観点からみても、まさに紀の川の恵みを受けていたといえる。

壇上伽藍

中世の高野山は、山麓部の紀の川流域に広大な荘園を保持し勢力を誇っていたが、それゆえに秀吉の紀州攻めの対象となった。根來寺及び粉河寺の炎上後間もなく、高野山は秀吉に降伏することにより焼き討ちを免れ、以後、秀吉の亡母の菩提を弔うために青巌寺が建立されるなど、その庇護を受けた。江戸期に入り、山内に徳川家康を祀る東照宮が建てられるなど、徳川家も高野山に篤い信仰を寄せ、諸大名も奥之院に競って墓碑・供養塔を建立した。今日も徳川家霊台にその名残を見ることができる。

金剛三昧院庭園

高野山の寺院は各地の大名との間に師檀関係を形成し、もてなしの設えとして自然や地勢を活かした庭園を整備し、また元来は質素であった精進料理に工夫を加え、各地から訪れる大名をはじめとする参詣客を迎えた。こうした大名との檀縁関係は、大名が治めた地域と塔頭寺院との間で「所縁坊」と呼ばれる関係に発展し、出身地域ごとに参拝者が滞在する宿坊が決められ、今もその名残がみられる。

現代に入っても、総本山金剛峯寺に高野山の歴史と信仰を表現した日本最大規模の石庭である蟠龍庭が整備されるとともに、重森三玲ら著名な作庭家による庭園が数多く整備されている

金剛峯寺 蟠龍庭

平成 16 年（2004 年）、紀伊半島の自然崇拝に根差した「神道」と大陸から伝来した「仏教」との融合によって独自に発展した霊場と参詣道の文化的価値が高く評価され、独特の文化的景観をもつ山岳宗教都市を形成する高野山は「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された。

現在、山内には 117 の寺院があり、そのうち 51 の寺院が旅行者の滞在を受け入れる宿坊を備える。紀伊山地の大自然に囲まれた高野山において、それぞれの宿坊が備える庭園は、宗教的聖地としての景観を支える役割を果たすとともに、日本の原風景を求めて世界中から訪れる旅行者に心の平安を与えている。

５．周遊観光の原点

古代において、和歌の浦の海は、内陸部に位置する奈良の都人にとって周遊観光の目的地であった。平安時代以降も、時の関白や大臣までもが高野参詣、熊野参詣や西国巡礼の際に訪れた憧れの海であり続けた。

粉河寺本堂

江戸期に入ると高野参詣、熊野参詣や西国巡礼が庶民にも一般化し、全国から多くの人々が高野山をはじめ粉河寺、根來寺などに参詣した。参詣の際には、寺院以外の景勝地なども訪れる人も多く、和歌山県内の各地を訪れる周遊観光は隆盛を迎えた。

歴史を通じて、あらゆる階層の人々が日常を離れ、信仰を伴った参詣を目的に紀の川流域及び周辺地域を目指して旅していたことをうかがわせる。

６．現代における庭園観光の可能性

昭和期の代表的な作庭家である重森三玲が高野山に多くの庭園を残したように、近代以降も新しい庭園が数多く整備されるなどし、現代においても、地域の多彩な観光資源と豊かな食文化や文化体験と相まって、国内外から訪れる観光客を魅了する可能性を有している。

福智院 蓬莱遊仙庭

この地域に花開いた庭園文化には、それぞれ歴史やストーリーが隠れており、紐解けばただ庭園を眺

めるのとは異なった姿が浮かび上がる。庭園の周辺地域に目を向けると、たとえば、小路にたたずむ店舗に並ぶちょっとした和菓子にも歴史が息づいていることに気づかされる。

本計画では、庭園を中心とする地域の文化的景観を守り、活用することで後世に文化的価値を伝えるとともに、アフターコロナの時代における新しい旅行スタイルとして、これまで観光資源の主力として捉えられる機会の少なかった庭園の有する潜在力を引き出し、歴史・文化的に価値ある庭園を取り入れた周遊観光を国内外に向けて提案する。

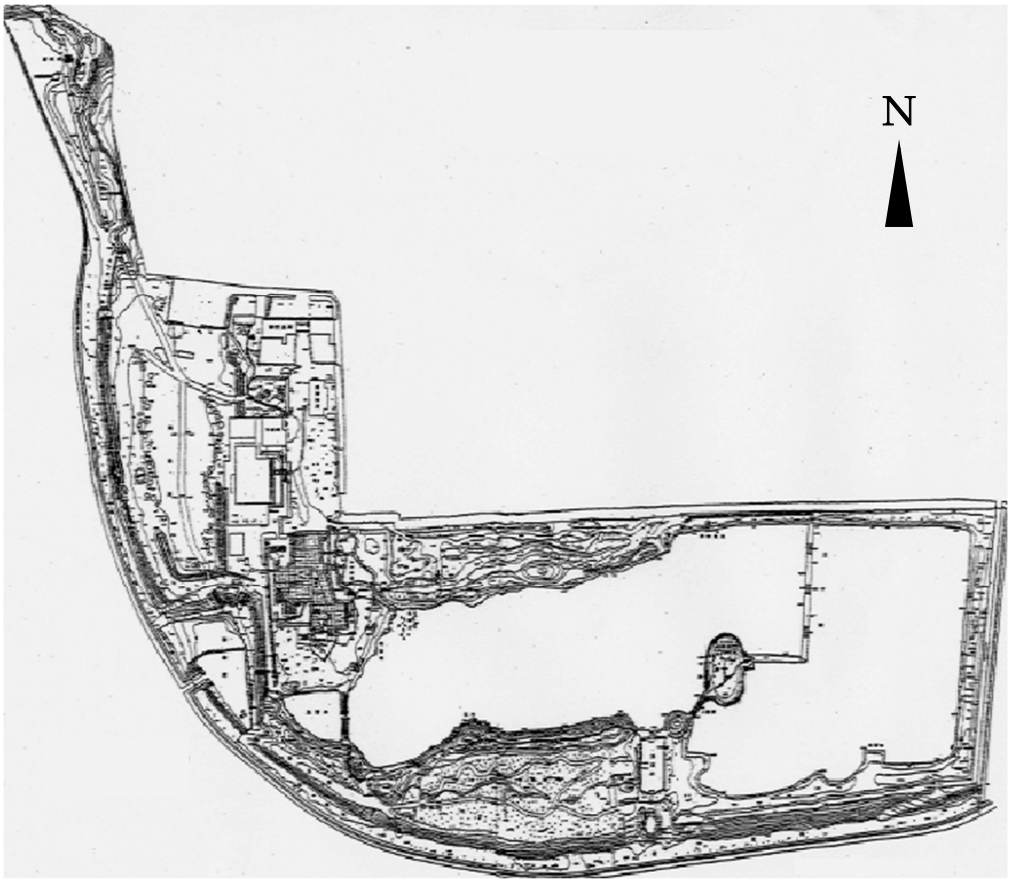
（様式１－５）

構成庭園一覧表

1	ふりがな 構成庭園の名称 （※１）	１．養翠園（ようすいえん）	構成庭園の所在地	和歌山市西浜 1164
	構成庭園の概要 （※２）	 【開 園 面 積】約 33,000 ㎡ 【入 園 料 金】大人 600 円、小人 300 円 【公 開 時 期】通年 【施設管理者】株式会社養翠園（民間） 【そ　の　他】国指定文化財　史跡・名勝 平成元年(1989 年)12 月 8 日指定 平成 25 年(2013 年) 3 月 27 日追加指定 年間入園者数：１万 1,392 人 **■養翠園** 養翠園は、紀州藩第 10 代藩主徳川治宝の別邸である水軒御用地の庭園として文政元年（1818 年）から９年（1826 年）にかけて造営された池泉回遊式、船遊式、借景式庭園である。また、海浜の立地及び風致を活かした「汐入」の様式をもつ江戸時代の庭園で現存するのは徳川将軍家の別邸浜御殿を前身とする旧浜離宮庭園と養翠園だけである。平明な地割で、庭園建築とともにもよく旧態を遺し、江戸末期の大名庭園の態様を知る上で貴重な価値を有するとして名勝に指定されている。		

庭園は養翠亭を中心に構成されており、中央に池泉が大部分を占めるＬ字型の敷地の東方には、和歌浦天満宮が位置する天神山や章魚頭姿山（たこずしやま。高津子山とも呼ぶ）を借景とした広大な池泉が設けられ、敷地の南辺と西辺は松ヶ枝堤により隣接する大浦湾と園内が区切られている。

庭園の景色は池泉の東部と西部で大きく異なり、東部は北岸から池泉の中央に配された中島に向けて直角に曲がる土堤が伸び、三つ橋と太鼓橋が架けられた中国杭州の西湖の蘇堤をモチーフとした中国風のものになっている。それに対し、養翠亭寄りの西側は曲線的な護岸をもち、章魚頭姿山を借景に持つ周囲の自然を取り込んだ日本的な回遊式庭園となっている。なお、三つ橋と太鼓橋は明治中期に掛け替えられた鉄筋コンクリート製であるが、現在に保存されている鉄筋コンクリート構造物としては最も初期のものにあたることから学術的評価が高い。



治宝が常緑の松を愛好したことから、植栽は松が主体で、現在、約 1,100 本の松がある。「立華すかし」と呼ばれる下から上に持ち上げるような姿にする手法で剪定されていることで、京風の仕立てとは異なる、線の太い豪快な景色を作っている。

治宝は、文化事業や藩政改革に力を注ぐ一方、趣味人としても知られ、茶の湯に深い造詣を持っていた。池泉の西側に建つ書院・養翠亭には、池泉を臨む御座の間の隣に露地を伴う茶室の実際庵等が付属している。ま

		た、次の間正面には「あやめ池」があって今はカキツバタが植わるほか、アジサイやツバキなどがそれぞれの季節の庭景に彩を添えている。
	計画のテーマでの位置づけ （※３）	養翠園は、紀州藩第 10 代藩主治宝が造営した大名庭園で、和歌の浦を囲う風光明媚な山々を裏面から借景として取り入れており、かつては紀の川の主流であった水軒川を水路として城下町と行き来できた。欧米列強諸国の足音が忍びよる中、藩主は風光明媚な庭園内の閑居で政策を練っていた。 敷地の大部分を占める池泉と松を主体とした広大な庭園は、街の喧騒を避けてゆっくり散策するのに最適である。
	交通	 JR 和歌山駅からバスで約 30 分 （「養翠園前」下車）

（様式１－５）

構成庭園一覧表

2	ふりがな 構成庭園の名称 （※１）	２．番所庭園（ばんどこていえん）	構成庭園の所在地	和歌山市雑賀崎番所ノ鼻
	構成庭園の概要 （※２）	 【開 園 面 積】約 15,000 ㎡ 【入 園 料 金】大人 600 円、子供 300 円（未就学児以下は無料） 【公 開 時 期】年中無休（荒天時･年末年始は臨時休園） 【施設管理者】吹上有限会社（民間） 【そ　の　他】年間入園者数：２万人 **■番所庭園** 番所庭園は雑賀崎から西に、平坦で海に長く突き出た地形をした「番所の鼻」に所在する景勝地である。和歌の浦は万葉の時代から風光明媚で名が知られており、神亀元年（724 年）10 月に聖武天皇が和歌の浦に行幸した際、藤原卿（不比等の子・房前か麿呂ではないかといわれる）が雑賀の浦の漁火を見て、その光景に感銘を受けて詠んだ和歌の石碑が庭園内に飾られている。 紀の国の 雑賀(さひか)の浦(うら)に 出(い)で見れば 海女(あま)の燈火(ともしび) 波の間(ま)ゆ見ゆ		

この番所の鼻に、幕末に紀州藩が海防のために遠見番所を設置した。藩領の長い海岸線十数ヶ所に番所があり、ここはその中でも紀伊水道を監視する番所として、狼烟場と共に重要な施設であった。その後、遠見番所は鷹の巣山頂へ移転したので、ここは「元番所」と呼ばれた。

紀州藩が海防施設を設置した背景には、嘉永６年（1853 年）の米国ペリーの来航がある。これが紀州藩における本格的な海防の取り組みを促した。その翌年の安政元年（1854 年）９月には、ロシア艦が朝廷や幕府を威嚇することで通商条約締結を実現しようと紀伊水道に出現した。幕府から下田で交渉に応じるとの回答を得たロシア艦が加太港に寄港し、藩士ら３名が艦に赴き応接した際、日ロ間の技術格差に驚き、紀州藩は同年１月に策定し終えていた海防計画実施に踏み切った。番所のうち雑賀崎カゴバ・元番所から和歌浦中道までの区域は家老三浦長門守が責任者を務め、「元番所お台場」が、現在の庭園の大芝生に構築された。紀州藩が出版した『異船記』には、この元番所お台場全体の鳥瞰絵図や大砲・鉄砲･人員の配置などが詳細に記載されている。

和歌山市の医師 滋野左右吉がこの地から望む風景を気に入り、地元住民等からかつての番所の跡地であった土地を大正初期から戦後にかけて５５年の歳月にわたって買い集めた。戦後の食糧難の時代は、地元の人々によって畑として利用されていたが、その後、歴史的遺構として保存するとともに庭園を整備し、昭和 41 年（1966 年）に番所庭園として開園した。

庭園が位置する番所の鼻は、万葉の時代からの景勝地であり、江戸期以降の海防上の要所であっただけでなく、日本神話の国土創世譚において神々により最初に誕生したとされる沼島（ぬしま、記紀では「おのごろ島」）を真正面に、さらに淡路島、四国といった神話上の舞台を一望することができる。日本史の視点に立って思いを巡らせながら庭園と眺望を鑑賞できる異例の庭園といえる。

	計画のテーマでの位置づけ （※３）	紀州徳川家の海防拠点のひとつであった元番所お台場跡の景勝地に50年余り前に開園した庭園。日本神話における国土創世譚の舞台と万葉人が見たであろう風景を芝生の上でくつろぎながら眺められる。武士の時代から近代へと移り変わっていく時代の緊張感を想像しながら散策すると、景色を楽しむのとは異なる感覚を味わうことができる。 釣りやバーベキュー、ヨガ、結婚式会場、ドラマ撮影など多様な用途に利用されている。紀伊水道を望んで視界を遮るものがない絶好のロケーションに加えて、芝生の緑と空の青のコントラストが美しく、市民や観光客にとって憩いの庭園となっている。
		 JR和歌山駅からバス・徒歩で約40分 （「雑賀崎遊園」下車）

（様式１－５）

構成庭園一覧表

３	ふりがな 構成庭園の名称 （※１）	３．和歌山城西之丸庭園（わかやまじょうにしのまるていえん）	構成庭園の所在地	和歌山市一番丁３
	構成庭園の概要 （※２）	 【開 園 面 積】8,217 ㎡ 【入 園 料 金】無料 【公 開 時 期】通年（12 月 29 日から 12 月 31 日を除く） 【施設管理者】和歌山市 【そ　の　他】国指定文化財　史跡・名勝 昭和 60 年(1985 年)11 月 27 日指定 年間来場者数：21 万 2,135 人（和歌山城天守閣） **■和歌山城の歴史** 慶長５年（1600 年）、関ヶ原の戦の功により入国した浅野幸長は、天正 13 年（1585 年）に豊臣秀吉の命によって結晶片岩の丘陵に築城された和歌山城の修築・拡張を行うとともに、城の大手を東から北に変更し、本町を大手通りとする城下町の都市計画を実施した。 元和５年（1619 年）、浅野に代わり徳川家康の第 10 男・頼宣が五十五万五千石を領して紀州徳川藩初代藩主として入国した。頼宣は、御三家のひとつにふさわしい居城とするため、城と城下町の整備・拡張を実施		

した。頼宣を祖とする紀州徳川家から第５代藩主・吉宗、第 13 代藩主・慶福（家茂）がそれぞれ第８代、第 14 代将軍となった。

城下町和歌山は、江戸後期には人口で全国第８番目の近世都市にまで発展した。文化面では、表千家とのつながりが深かった紀州徳川家のもとで茶道文化が花開き、祇園南海や野呂介石が文人画の分野で光彩を放った。

城下町周辺には万葉集に歌われた和歌の浦、西国三十三所観音巡礼二番札所の紀三井寺、加太の淡嶋神社など、名所や霊場があり諸国から多くの旅人が訪れた。

■西之丸庭園

歴代藩主が数寄や風雅を求めて過ごした西之丸御殿の庭園で、かつては能舞台や茶室も設けられていた。池泉回遊式の庭園で、紀の川から外堀を通じて取水した内堀に柳島を配置することで作り出された大きな園池を利用している。

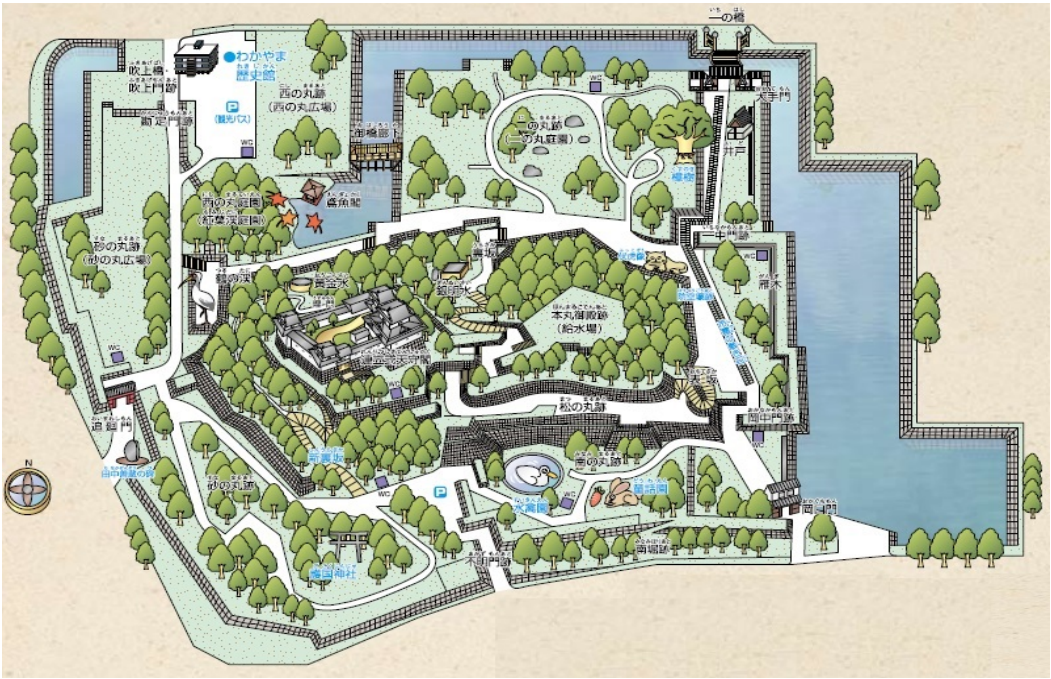
天守の建つ虎伏山の急峻な斜面を利用し、滝石組を中心に立石を多く据えることで豪快に作庭されている。庭石として主に用いられたのは、文字通り現地調達できる結晶片岩（青石）である。庭園南西の高台には、離れ座敷の「聴松閣」と茶室の「水月軒」が建てられており、藩主が茶室から庭園全体を見渡しながら茶を楽しむような造りになっていたと考えられる。通説では紀州徳川家初代の徳川頼宣の命による作庭とするが、徳川家以前の城主であった浅野家の家老上田宗箇による作庭との説もある。

昭和 45 年（1979 年）からの修理の際の発掘調査により周囲の庭園建築や茶室の跡も発見された。遺存例の少ない城郭内庭園として貴重との評価を受け、昭和 60 年（1985 年）に国の名勝に指定された。

本庭園は、池辺の随所に配置された豪壮な石組や力強く勢いのある滝口、軽快な水の流れなど、意匠、材質ともに優れており、毎年秋になると庭園内の紅葉が見事に色づく事から「紅葉渓庭園」とも呼ばれている。

■**主な年間行事**（和歌山城）

新春初登閣　天守閣で初日の出を	１月１日
和歌山城桜まつり	３月下旬～４月上旬
和歌山城納涼ナイター	７月 20 日～８月 31 日
和歌山城公園菊花展	10 月中旬～11 月中旬



計画のテーマでの位置づけ（※３）	紀州徳川家の居城であり、和歌山市のシンボルである和歌山城内に整備された庭園。江戸初期に作庭されたと考えられており、当時の庭園文化を今に伝える。 初代藩主頼宣が鷹狩の際に立ち寄った長保寺で献上された料理を再現した紀州徳川家献上料理、頼宣に仕えた田宮長勝が広めた田宮流居合術など、豊富な文化体験メニューを組み合わせることで、江戸期の和歌山の文化をより深く知ることができる。 県都和歌山市の中心に位置し、関西国際空港から自動車で約 40 分、公共交通機関で約１時間と交通の便に恵まれ、庭園周遊の起点としても終点としても利便性の高い立地である。

	交通		JR 和歌山駅からバスで約 13 分 （「市役所前」下車） 南海本線和歌山市駅から バスで約 10 分 （「市役所前」又は「県庁前」下車）

（様式１－５）

構成庭園一覧表

4	ふりがな 構成庭園の名称 （※１）	４．根來寺庭園（ねごろじていえん）	構成庭園の所在地	和歌山県岩出市根来 2286
	構成庭園の概要 （※２）	 【開 園 面 積】約３万 2,000 ㎡（書院前面の庭園及び聖天池を含む） 【入　山　料】500 円 【公 開 時 期】通年 【施設管理者】新義真言宗総本山 根來寺（民間） 【そ　の　他】国指定文化財　史跡・名勝 昭和 33 年(1958 年) 5 月 15 日指定 平成 19 年(2007 年) 2 月 6 日追加指定 **■根來寺の歴史** 根來寺は、高野山で真言密教を修めた覚鑁（かくばん）上人（1095～1143）によって開創された新義真言宗の総本山で、開山以来、約 900 年の歴史と伝統を誇る。 覚鑁上人は、高野山において真言密教の復興に尽力し、学問探求の場として大伝法院を建立した。天応元年（1288 年）頃に大伝法院は、僧侶の教びの拠点として根來寺に拠点を設け、中世において、根來寺は多くの学僧を抱える「学山」として発展するに至った。 室町時代後期、戦国大名に比肩する勢力を誇った根來寺は、宣教師ルイス・フロイスが当時の日本をヨーロッパに紹介した『日本史』の中でも、一大		

宗教都市として驚きをもって記録されている。

こうした勢力の拡大に危惧の念を抱いた豊臣秀吉による紀州攻めにより、現存する日本最大の木造多宝塔・大塔（国宝）など一部の建造物を残して全山が焼失したが、江戸期には紀州徳川家の庇護を受けて復興するに至った。

根來寺は、大塔とともに、天正の兵火を逃れた数少ない建物である大師堂や丈六仏三体（ともに重要文化財）、発掘調査により中世末の状態のまま地下に保存されていることが判明した寺院の遺跡など（根來寺境内として国指定史跡）、中世における寺院の成立と展開、政治・経済等との関連を具体的に知ることができる重要な寺院である。

■根來寺庭園

寛政 12 年（1800 年）から翌享和元年（1801 年）にかけて、紀州徳川家の吹上御殿御座所を移築した「奥書院」に付随して作庭されたと認められる。池泉庭園（奥書院庭園）と枯山水とで構成されており、意匠簡素であって風趣ととのい、よく当時の手法を残しているとして名勝に指定されている。

北面と西面に位置する池泉庭園は、山の斜面を背景にして山裾に配置されている。建物からの観賞を意図してデザインされた座観式である。

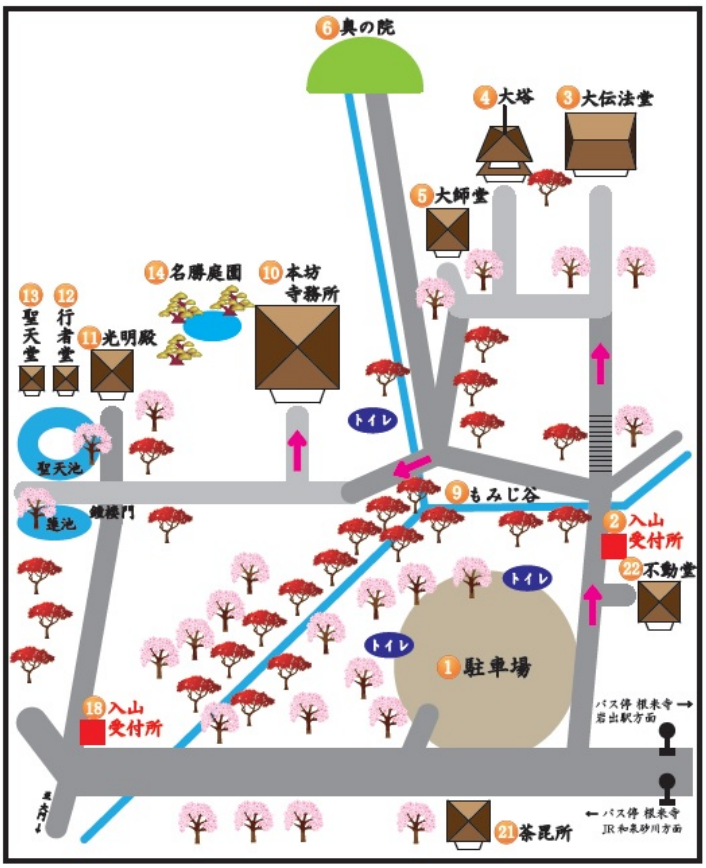
北東の滝は山裾の立地を生かし、山の水を水路で導入している。滝石組は三段で、玉澗流の手法がとられ、上段と中段の両側に立つ滝添石が滝の存在を強調している。一番の見どころは滝口で、池にそそぐ下段は水の滝落ちを半ば隠すように浪分石が配されているのが珍しい。滝の右奥の斜面に立つ遠山石により、滝が深山に立地することを暗示し、空間の広がりを演出する。池の北部中央には亀島、その南東に小ぶりな鶴島が置かれ、亀島の西南方には岩島を配して景色に変化をつけている。池の南岸から鶴島、鶴島から亀島へと石橋が架けられている。急斜面の山裾を背景に、このように複雑に組まれた池泉が、美しい景色をつく

っている。

書院前面に位置する枯山水は、砂紋の美しい白砂敷と石組みによって構成されており、格式ある寺院に相応しい清浄感を漂わせる。

奥書院に付随する庭園に加えて、聖天池も庭園として名勝指定に含まれる。堤を築いて山からの水を受ける機能に園池としての修景を加えたもので、池の中央に作られた島には弁財天が祀られ、一帯に植えられたマツ・カエデなどの植栽や石組みが風致に富む。天正３年（1574 年）の年号を記す「一乗山根來寺絵図」に記されており、伽藍が現在のような配置となった早い時期からの遺構として貴重なものと評価を受けている。

庭園として一体の価値を構成する区域全体の保護を図るため、眺望の対象となる背後の山地等本坊の区域や聖天池の構成要素として重要な聖天堂及び行者堂、楼門などの区域を含め、平成 19 年(2007 年)に名勝の追加指定が行われている。



	計画のテーマでの位置づけ （※３）	根來寺は、葛城連峰の一峰である一乗山の南麓と、南側の前山に挟まれた平地部と谷筋に位置する。紀の川北岸地域には、かつて都が置かれた奈良や京都から通じる南海道や近世に整備された淡島街道や大和街道といった主要道が走っていた。境内の山から流れる水は根来川に注ぎ、やがて紀の川と合流している。大阪方面と奈良方面から延びる街道と紀の川の水運も相まって、根來寺は交通の要衝に立地していた。 かつて、根來寺の勢力は、大阪府南部の南河内から和泉、岸和田付近まで及んでいた。強大な勢力を危惧した豊臣秀吉による紀州攻めにより、多宝塔など一部の建物を残して全山が焼失したが、江戸期に紀州徳川家の庇護を受けて復興し、本計画を構成する奥書院庭園も整備された。 四季折々の変化に富む約 350 万㎡の境内は中世の佇まいを残す。和歌山県随一の桜の名所としても名高く、春には多くの観光客の目を楽しませる。境内にある根来塗の工房で、日本三大漆器の一つに数えられる根来塗の体験が可能である。 関西国際空港から 30 分の好位置にあることから、国内外からの観光客をターゲットにした地域のゲートウェイとしても大きな可能性を有する。
	交通	 JR 岩出駅からバスで約 22 分（「根来寺」下車）

（様式１－５）

構成庭園一覧表

５	ふりがな 構成庭園の名称 （※１）	５．粉河寺庭園（こかわでらていえん）	構成庭園の所在地	和歌山県紀の川市粉河 2787
	構成庭園の概要 （※２）	 【開 園 面 積】3,422.775 ㎡（名勝の指定範囲） 【入 園 料 金】無料（本堂内陣拝観は 400 円） 【公 開 時 期】通年 【施設管理者】粉河観音宗総本山 粉河寺（民間） 【そ　の　他】国指定文化財　史跡・名勝 昭和 45 年(1970 年) 4 月 23 日指定 年間参拝者数：14 万 9,000 人 **■粉河寺の歴史** 粉河寺は、和歌山県北部を東西に流れる紀の川中流域の北岸に位置し、西国三十三所観音霊場の第３番札所として、古くから多くの参拝客を迎えてきた。 宝亀元年（770 年）、猟師・大伴孔子古（おおとものくじこ）によって開かれたと伝わり、孔子古がこの地で千手観音の化身である童男行者に出会った経緯が日本を代表する縁起絵巻である国宝「粉河寺縁起絵巻」に記されている。 平安時代以降、観音霊場として広く知られ、鎌倉時代には４ｋｍ四方		

の境内に７堂伽藍、550 坊を擁して隆盛を極めた。豊臣秀吉の紀州攻めで、ほぼ全山が焼失したが、江戸期に紀州徳川家による援助もあって本堂・大門・中門・千手堂（いずれも重要文化財）が再建されるなど再興に至った。

■粉河寺庭園

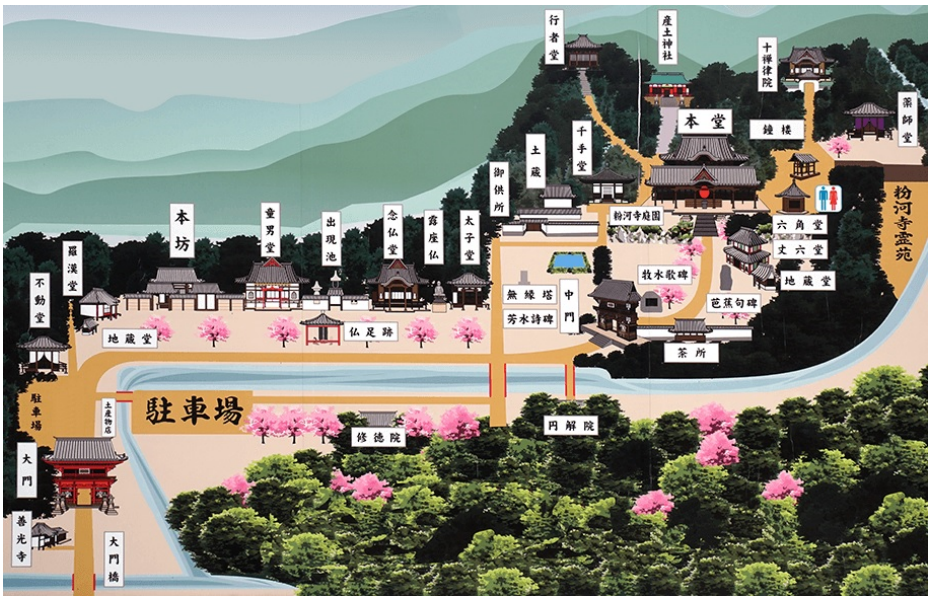
粉河寺庭園は、西国三十三所で最大規模を誇る本堂に通じる高さ３メートルの石階段の両翼に、土留の石垣の用途も兼ねて巨石をふんだんに用いて組み上げられた大規模な枯山水庭園であり、桃山時代に千利休と師弟関係にあった茶人で浅野家の重臣でもあった上田宗箇の作庭と伝わる。

正面の石階段を挟む東西の斜面に、紀州産の青石・紫石・竜門石などの巨大な岩石が多数かつ変化に富む手法で美しく組まれている。いわゆる青石や紫石は紀州の川沿いで産出する結晶片岩で、無機物ながらも紀の川の恵みとも言える。サツキの刈込みで石の隙間をうずめ、さらにソテツやシンパクなどの植栽が庭景をととのえている。

西国三十三所巡りの参詣者に対する視覚的なもてなしが、その造営の意図と考えられ、独創的な制作意欲がよくうかがわれる点で他の定型的作庭には見られない魅力に満ちているとして名勝に指定されている。

本庭園の最大の見どころは本堂に通じる中央石階段西側の西寄りにある枯滝石組である。上部に石橋を架ける玉澗流の手法がとられており、その右に大型の立石を据え、橋の下を水が滝となって流れる様子を段をなす石組で表現している。

枯滝石組の下部は、向かって右側を亀石組、左側を鶴石組としている。他にも亀を表現したとみられる石組みが数多くみられ、同一庭園内に亀石が複数配置されている構成は非常に珍しいものである。

		中央石階段東側の石組は立石の鉛直性と伏石の水平性の組み合わせが静的な佇まいを見せている。 大門から石畳の参道を進み、紀州徳川家第 10 代藩主治宝の直筆による「風猛山」の扁額が掛かった格式ある中門を過ぎた左手に庭園がある。西国三十三所で最大規模とされる本堂と庭園とが織りなす風景は壮観である。  境内には、粉河寺の名の由来となった「粉を溶かしたかのように白い水が流れる川」が流れ、大門の脇を過ぎてほどなく紀の川に注ぐ。
	計画のテーマでの位置づけ （※３）	粉河寺は、中世には根來寺や金剛峯寺と並ぶ大寺院であったが、その勢力を危惧した豊臣秀吉による紀州攻めに遭い、偉容を誇った堂塔伽藍と多くの寺宝を焼失した。その後、紀州徳川家の庇護と信徒の寄進によって、江戸時代に復興が図られた。ただ、火災等もあり、現存の諸堂は江戸時代中期から後期のものである。桃山時代の豪華な作風が現れた本堂前の石庭は訪れる人を圧倒している。 粉河寺は、和歌山市から高野山に至る周遊ルート上に位置し、境内に擁する多くの文化財並びに他に類例がない構成の庭園は、国内外からの観光客を引き付ける魅力を備える。紀の川北岸に位置する JR 粉河駅から続く参道は「とんまか通り」と呼ばれる典型的な門前町で、その風情が郷愁を誘う。 かつて紀州藩は、米作りが困難な山間部を中心に果樹栽培を奨励した。そうした経緯から、粉河寺のある紀の川市は、全国有数のフルーツ産地となっている。桃、柿、イチゴ、ブドウ、柑橘類など季節ごとの多彩なフルーツを活かしたフルーツ観光にも取り組んでおり、古刹や庭園とフルーツ観光との組み合わせによる相乗効果も期待できる。

	交通	 JR 粉河駅から徒歩で約 15 分

（様式１－５）

構成庭園一覧表

6	ふりがな 構成庭園の名称 （※１）	６．金剛峯寺の庭園	構成庭園の所在地	和歌山県伊都郡高野町 高野山 132
	構成庭園の概要 （※２）	 【開 園 面 積】2,340 ㎡（蟠龍庭） 【拝　観　料】1,000 円（金剛峯寺拝観料） 【公 開 時 期】通年 【施設管理者】高野山真言宗　総本山金剛峯寺（民間） 【そ　の　他】世界遺産（金剛峯寺）（2004 年 7 月 7 日登録） 年間参拝者数：23 万 8,165 人 **■高野山と金剛峯寺の歴史** 弘法大師空海は 20 歳で出家し、31 歳の延暦 23 年（804 年）唐に渡った。唐の都・長安で高僧・恵果和尚（けいかしょう）について、真言の教えをうけ、２年余りで真言密教の奥義を極め、８人目の阿闍梨「遍照金剛」の称号を得た後、大同元年（806 年）に帰国して、真言密教を各地にひろめた。当時の帝、嵯峨天皇より高野山を賜り、弘仁７年（816 年）に諸弟子や工人等多数を伴って登山し、開創に着手した。 20 年後、弘法大師は 62 歳の承和２年（835 年）３月 21 日に入定し、永		

遠の瞑想に入った。その後、高弟の真然大徳が中心となって、堂宇が調えられ、仏教修禅の大道場として栄えた。

安土桃山時代、豊臣秀吉が現在の金剛峯寺となる興山寺と青巌寺の二つの寺院を建立したことで高野山は繁栄の時代を迎える。その後、江戸初期において、徳川家康と２代将軍・秀忠の菩提を弔うため、３代将軍・家光が霊廟を造営した影響は特に大きく、諸国の大名家が競うかのように山内の各院と師檀関係を結び、立派な墓所・供養塔を築くに至った。弘法大師入定の地として高野山信仰の中心である御廟へと至る参道には、豊臣家や徳川家をはじめ全国の諸大名や皇族・貴族、法然や親鸞といった大宗教家、市井に生きた無数の人々の墓所・供養塔を見ることができる。

現在の金剛峯寺は、明治２年（1869 年）、それまでの高野山の中心寺院であった青巌寺と興山寺を統合して、高野山開創以来の名称に復した寺院で、東西に隣接した二つの寺が総本山としての役割を担う。狩野探幽や山本探斉などの名だたる絵師による襖絵や豊臣秀次自刃の間など歴史上の人物にまつわる部屋が数多く残り、高野山の伝統と格式を感じることができる。

■蟠龍庭（ばんりゅうてい）

昭和 59 年（1984 年）の弘法大師御入定 1150 年・御遠忌大法会の準備過程で、奥殿を中心とする庭園を全面改装することで造園された、2,340 平方メートルに及ぶ国内で最大級の石庭である。

この石庭では、雲海の中で、勅使門から見て左に雄、右に雌の一対の龍が向かい合い、奥殿を守るように表現されている。

雌雄一対の龍を表す石には、弘法大師誕生の地である四国の花崗岩が使用されており、また、雲海を表す白砂には、弘法大師が当時の都における拠点（東寺）を置いた京都の白川砂が使用されている。弘法大師誕生から高野山開創に至る歴史と信仰を表現した庭園であるといえる。

		■四季の庭 天皇や上皇が参拝された際の応接間として使用された上檀の間の前にある中庭は、江戸期の作庭と伝わり、池と建物の間の広い空間では儀式が執り行われたのではないかと考えられる。作庭当時、高野六木（こうやりくぼく）と呼ばれる松、杉、檜、高野槙（こうやまき）、樅（もみ）、栂（つが）が池の周りに植えられていたという。高野六木はそれぞれ寺院の建築用材として利用され、総本山金剛峯寺によって森林の保護育成が図られてきた。 現在は、晩春になると石楠花（シャクナゲ）が咲き、梅雨が近づくとモリアオガエルが池の周囲に産卵し、秋になれば紅葉、冬には白銀の世界が広がるなど、四季折々の表情が見られる素朴で心和む庭園となっている。
	計画のテーマでの位置づけ（※3）	高野山は信仰を中心とした山岳宗教都市であり、農作物の生産を行わないことから、山麓の紀の川流域に所有していた荘園や周辺の村々から食糧や生活物資が運ばれていた。墓碑・供養塔に使われた巨石もまた、紀の川の水運を利用して遠方からもたらされ、関西方面からの参拝客も紀の川を渡って、高野山町石道などの参道を登って高野山に至った。 高野山は、高野山真言宗 3,600 寺を有する総本山であり、山内に配置された伽藍と奥之院の両壇を中心として、総本山金剛峯寺を始めとする 117 カ寺が神秘的な霊場を形成し、国内外から多くの参拝客を集めてきた。大阪から直通電車で約 1 時間 40 分、繁忙期の秋に関西国際空港との間で運行される直通リムジンバスで 105 分、近年は JR 京都駅からの直行バスも運行されている。山内は路線バスが運行されており、山間部に位置しながらもアクセスに恵まれる。 世界遺産にも登録された高野山は和歌山県の定番の観光地であるが、定番であるがゆえにこれまで庭園の魅力が隠れていたといえる。金剛峯寺には、江戸期の狩野派の襖絵や現代の日本画家千住博画伯により奉納された障屏画《瀧図》と《断崖図》の襖絵など見どころが多い。山内では、壇上伽藍や奥の院といった定番の観光スポットに加え、参拝客をもてなす精進料理や和菓子、宿坊での仏教体験など魅力な観光資源が豊富である。庭園の隠れた魅力に焦点を当て、多彩な文化体験と組み合わせることで、高野山を初めて訪問する方だけでなく、訪問したことがある方にも新しい切り口から高野山滞在を楽しむことを提案する。

	交通	 南海高野線高野山駅からバスで約 13 分（「千手院橋」 下車）

その他計画の実施にあたって必要な事項

７つの構成庭園に加えて、周辺地域における文化的・歴史的な価値を有する景勝地及びその他庭園、地域の食文化、地域の歴史や風土を感じられる体験プログラムを組み合わせて紹介することで、訪れる人々に地域への理解をより一層深めてもらうとともに、広域圏並びにそれぞれの地域における構成庭園をハブとした周遊・回遊観光を促進する。

景勝地及びその他庭園

１．和歌の浦の景勝地

潮が引けば現れる干潟、潮が満ちれば陽光を受けて輝く海に、玉のように連なる島に見える６つの島山。海のない奈良の都からの長い旅路の末に和歌の浦にたどり着いた万葉人は、感動に心を震わせて歌を詠んだ。現在は、６つの島は妹背山を除いて陸続きになっており、なお見飽きることのない美しさをとどめる。平成 22 年(2010 年)には「和歌の浦」として名勝に指定されており、地域全体を風光明媚な庭園ともみなすことができる。

和歌の浦の干潟

万葉の時代に続く平安の世にも、和歌の浦は都人の憧れの景勝地として愛され続け、やがて玉津島神社に衣通姫が和歌の神として祀られると、多くの貴人・歌人がこの地を和歌の聖地と崇めて訪れた。また、菅原道真が大宰府へ向かう途中、海上の波風を避けるため和歌の浦に停泊した際、和歌の浦を臨んで歌を詠んだという伝説が残る天神山の中腹には、道真を祀る和歌浦天満宮が鎮座し、今日も学業成就を願う参拝者が絶えない。

玉津島神社

江戸時代に至っても、和歌の浦は人々を魅了した。紀州徳川家初代藩主頼宣は、父である家康を祀るために紀州東照宮を造営した。侍（さむらい）坂とよばれる 108 段の石段を登りきり、関西の日光と謳われる、極彩色に彩られた朱塗りの楼門から振り返ると、心が吸い込まれるような和歌の浦の風景を味わうことができる。

和歌浦天満宮

紀州東照宮が完成した翌年から頼宣が開始した例大祭は和歌祭と呼ばれ、和歌山を代表する祭りとして今日も人々に親しまれている。重量１トンもの神輿が侍坂を駆け下る様子の勇壮さ、それに続く、多様な種目の技芸を披露する渡御行列は、時代絵巻を見るようである。

紀州東照宮

江戸時代後期に建造された不老橋は、藩主をはじめ和歌祭関係者が御旅所に向かうために通行する「お成り道」に架けられた橋である。九州地方以外では珍しいアーチ状の石橋で、欄干部分の雲のレリーフがあるなど装飾的にも優れている。

不老橋

妹背山のふもとにたたずむ水上楼閣・観海閣は、妹背山周辺整備の一環として頼宣により建設され、頼宣はここから対岸の西国三十三所霊場第二番札所・紀三井寺を遥拝したと伝わっている。一般庶民にも開放され、住民や西国巡礼者などでにぎわう様子が『紀伊国名所図会』に描かれている。

観海閣

古代の紀の川の河口で、現在は和歌川が和歌浦湾にそそぐ河口部には、片男波と呼ばれる、1,000 メートルを超える砂嘴が伸びている。片男波という名は、山部赤人の歌に由来し、『万葉集』を学べる万葉館や、散策を楽しめる万葉の小径が整備されている。また、片男波海水浴場は、関西有数の海水浴場として親しまれている。

片男波

養翠園の借景となっている高津子山（たかつしやま）には、標高 136 メートルの山頂に 360 度見渡せる展望台が設置され、海から和歌山市の市街地全域へと続く大パノラマが楽しめる。番所庭園と同じくここからも沼島や淡路島、遠くに四国までを見晴らすことができ、紀伊水道に沈む夕日は特に素晴らしい。春にはソメイヨシノが咲き誇り、市民の憩いの場となる。

春の高津子山

和歌の浦に関連する庭園として、第５代将軍徳川綱吉に重用され甲府藩主となった柳沢吉保が、元禄年間、江戸・駒込（東京都文京区）に造営した六義園が有名である。吉保は和歌に造詣が深く、その文芸趣味に基づいて、和歌の浦の出汐湊や妹背山あるいは、藤代峠など、和歌に読まれた景勝を園内に八十八景として表現した。明治期には三菱の創業者岩崎彌太郎の所有となり、現在は国の特別名勝となっている。

六義園

２．高野山宿坊の庭園

近世初頭以降、高野山の宿坊には庭園が整備され、壇越である大名はもとより訪れる参詣客の目を楽しませてきた。加賀百万石・前田家の三代目当主・利常の夫人、珠姫の菩提寺として建立され、前田家の菩提所ともなった天徳院の庭園は、江戸時代初期に小堀遠州により作庭されたと伝わる（国指定名勝）。桃山時代初期に作庭された宝善院庭園（県指定名勝）をはじめとする歴史のある古庭園、昭和を代表する作庭家・重森三玲による現代の庭園など、宿坊の庭園の多様性には目を見張るものがある。特に、重森三玲の庭園は山内に数多く整備され、わずか東西３キロメートル、南北２キロメートルほどの広さの山内に、初期の作品から最晩年の作品までが残されている。

宿坊の多様な庭園を鑑賞するには、宿坊に宿泊するのが一番である。宿坊によっては、庭園を独り占めできる部屋があり、じっくりと庭園を眺めて過ごすことができる。夜間にライトアップしている庭園もあり、昼間とは異なる雰囲気で楽しむこともできる。さらに、宿泊客でなくとも庭園の見える部屋で精進料理の昼食を楽しめる宿坊もあれば、庭園に面したカフェから鑑賞できる宿坊もある。様々な滞在スタイルに応じて鑑賞できることが、宿坊の庭園の魅力といえる。

天徳院庭園（国指定名勝）

宝善院庭園（県指定名勝）

光臺院庭園（登録記念物）

西禅院庭園（登録記念物）

櫻池院庭園（登録記念物）

福智院庭園

地域の食文化

和歌山県北部に位置する紀の川流域とその周辺地域は、温暖な気候と風土、歴史的背景に恵まれ、世代を超えて受け継がれてきた多様な食文化がみられる。先人たちが長い時間をかけて培ってきた自然を尊重し、季節感を楽しむ感性がこの地域の食文化に反映されているといえる。「食」にも地域の歴史と文化が詰まっていることを、庭園とともに紹介し、五感を通して地域の歴史・文化も体験することを観光客に提案する。

１．紀州徳川家御用達の和菓子

紀州徳川家初代藩主・頼宣の国替えに随伴して和歌山に移転した創業 560 年の老舗和菓子店で、煉羊羹発祥の店である総本家駿河屋善右衛門。紀州藩は表千家との関係が深く、茶道が盛んであったことから和菓子の文化も発展した。駿河屋の代名詞ともいえる「本の字饅頭」は、紀州徳川家の歴代藩主が旅中の食糧として携行したと伝わる由緒ある菓子である。

２．紀州徳川家献上料理

伊勢に鷹狩りに出掛けた初代藩主頼宣が、紀州徳川家の菩提寺である長保寺（海南市）に立ち寄った際に献上された食事の記録を元に、地元の調理師協会がレシピを復元。和歌山城下の茶室または老舗料亭で味わうことができる。

３．和歌浦のかまぼこ

風光明媚な和歌浦は、古くから漁業の町でもあった。かつては和歌浦地区に複数あったかまぼこ店は、2019 年に最後の一軒が地域の人々に惜しまれながら廃業した。その老舗かまぼこ店に勤めていた熟練の職人が、クラウドファンディングを活用して和歌浦にかまぼこ店を構え、再び地域の伝統の味を楽しめるようになった。

４．和歌浦せんべい

卵をたっぷり使って焼き上げられた、やさしい風味のおせんべい。紀州藩の御用菓子司であった総本家駿河屋の古い見本帳に製法が記録されており、明治期以降に起こった観光ブームで一般に出回り始めたといわれる。和歌浦の名所である「不老橋」や「海観閣」などの焼き印が一枚一枚に押されている。パッケージに描かれた和歌浦の風景が、旅の思い出をよみがえらせる。

５．フルーツ王国

江戸期に紀州藩は、特に米作りが困難な山間部において、みかんや梅などの果樹の栽培を奨励した。

紀の川市では、紀の川がもたらす豊饒な大地と穏やかな気候に恵まれ、豊富な農産物が生産される。特にフルーツ類は、桃、柿、柑橘類をはじめとする多種多様な品種が生産されており、その品質も生産量も全国有数のフルーツ王国である。

日本におけるファーマーズマーケットの先駆けであり、全国屈指の売り上げを誇る「めっけもん広場」が、県内外から高品質のフルーツを求める人々を惹きつける。

地元産のフルーツをふんだんに使用したパフェなど定番のスイーツの他、粉河寺の門前町に位置する地域の名店「力寿し」では、フルーツをネタにしたフルーツ寿しという特色あるメニューが提供されるなど、観光客に新鮮な驚きを与えている。

６．高野山の精進料理

真言密教の根本道場として開創された高野山は、修行の場であることから、山内での農作物・花木の生産を行ってこなかった。食糧や生活物資は、高野山が紀の川流域に持つ荘園や周辺の村々から運ばれていた。こうした風習は「雑事登り（ぞうじのぼり）」として近世まで続いていた。

高野山では、食事も修行の一環であり、厳しい戒律に則った、修行としての精進料理が伝わっている。現在、宿坊において参拝客に提供される精進料理は、元々は儀式・催事後に僧に振舞われた「振舞料理」がルーツで、平安時代から皇族や大名をはじめ、全国から訪れた参拝客に対して、ようこそお越しくださいました、とおもてなしの気持ちを込めて提供されてきた。

高野山における精進料理の基本は、「五味・五法・五色」と言われ、「五味」は醤油、酢、塩、砂糖、辛み。「五法」は生のまま、煮る、焼く、揚げる、蒸す。「五色」は五つの色合い、つまり見た目に鮮やかに盛り付ける、といった意味をもつ。また、「五禁」として葱、生姜、ラッキョウ、ニラ、ニンニクといった匂いの強い野菜は修行を妨げないために使用しないことも特色である。

７．高野山の胡麻豆腐

高野山で修行生活を送る僧侶にとって貴重な栄養源として重宝され、精進料理に欠かせない一品。かつては修行僧にとっては調理もまた修行であるといわれた。

胡麻の外皮を剥いて挽く高野山伝統の製法による濃厚な胡麻の味わいと、吉野本葛を使用したもっちりとした食感を味わえる。

８．高野山の和菓子

古来より大勢の参拝客を迎えてきた高野山では、独自に発展した様々な和菓子が今日も数多く残っている。

とりわけ焼き餅の歴史は古く、高野山開創当時に一人の老婆が作った塩焼きが始まりとされ、山麓から続く参詣道の中間地点に位置する花坂地区に多く設けられた茶屋で供されてきた。薄い餅であんを包んで焼き上げる素朴な焼き餅は、参拝客が持ち運びしやすいよう独特の平らな形をしているなど、高野山の歴史を感じさせる和菓子である。

文化体験プログラム

１．和歌の浦遊覧船

名産のシラスの漁船に乗って、万葉の時代からの景勝地・和歌の浦を海から周遊することができる。360 度のパノラマビューで船上から眺める風景は格別である。

和歌浦湾周遊コース、サンセットコース、花火観覧コースなどがあり、刻々と表情を変える海の風景を満喫できるのも魅力である。下船後には、漁港内にあるシラス店で新鮮なシラスをお土産に購入することもできる。

２．紀州藩伝承の田宮流居合術

初代藩主頼宣に仕えた田宮長勝が広めた紀州藩の武芸、田宮流居合術を、かつての武道場の雰囲気を今に伝える「武徳殿」で体験できる。

胴着に着替えて、真剣と同じ重さの模造刀を使用する本格的な武術体験で、居合の心得や所作、田宮流の基本の型である壱之型『稲妻』を学ぶ。

３．語り部と歩く根來寺

「いわで語り部クラブ」の語り部が、根來寺を中心とした岩出市の歴史・文化・風土を紹介しながら、境内及び旧和歌山県議会議事堂を案内する。

主要な見どころをはじめ、見過ごしてしまいがちな場所や地元ならではの興味深いエピソードも紹介し、根來寺への理解を深めることができる。

４．根来塗体験

根来塗の起源は、根來寺の僧徒が寺内で使用するために製作した仏具や食器類の朱漆器とされる。黒漆による下塗りに朱漆塗りを施すのが特徴で、豊臣秀吉の紀州攻めの際、塗師達が和歌山県海南市の黒江をはじめ全国の漆器産地に拡散した。

根來寺境内にある、現役の塗師の工房では、スプーンや箸などの漆塗りを体験することができる。

５．高野参詣道ウォーキング

高野山周辺には、山麓から高野山へと続く７つの参詣道や女性が参拝した女人道などが残されている。お堂・地蔵や農村の風景など往時の面影を残す参詣道を歩きながら、弘法大師による開創以来、高野山が重ねてきた歴史に思いをはせることができる。

町石道は、高野山の表参道であり、壇上伽藍の根本大塔を起点に１町ごとに、山麓の九度山町にある慈尊院まで 180 基、奥之院の弘法大師御廟まで 36 基の町石が建てられており、参詣者を今日も導いている。

女人道は、明治５年（1872 年）に女人禁制が解かれるまでの間、山内へと至る７つの入り口であった高野七口にそれぞれ設けられた女人堂を結ぶ参詣道であった。女人堂から女人堂へと、八葉の蓮華に例えられる峰々をたどりながら、弘法大師御廟を遥拝したと伝わる。

６．宿坊での仏教体験

高野山には 117 の塔頭寺院があり、そのうち 51 のお寺は宿坊として参詣者に宿を提供している。各宿坊自慢の庭園をゆっくり鑑賞することは、宿坊に宿泊する醍醐味の一つであるが、そのほかに、朝の勤行、護摩、阿字観、写経といった、俗世から離れた非日常的な空間での体験により、心身ともにリフレッシュすることができる。

写経とは、経典を書写することであり、仏法を広めるための僧侶の重要な修業のひとつであった。仏教の中心的な経典である般若心経の一字一句に願いを込めて浄書すれば、雑念を払い、心が安らかになるといわれる。完成した写経は奥之院に奉納される。

阿字観は、真言宗に伝わる瞑想法の一つで、宇宙の本体である大日如来を象徴し、すべての言葉の始まりとされる梵字「阿」に向かって精神を集中する。瞑想を深めることによって仏と一体の境地に入り、悟りが実現すると言われる。

（様式１－８）

実施する事業と実施体制

（１）これまでの取組

１．2020 年度

（１）2021 年２月

和歌山県ガーデンツーリズム推進協議会設立

（２）2021 年３月

①ファムトリップの実施

関西観光本部と連携して、外国人有識者によるモニター調査を実施するとともに、外国人目線で庭園周遊観光の魅力を伝える旅行記事（日本語・英語）を制作。

②ウェブサイト開設

個々の庭園が単独で PR することでは得られない相乗効果を狙い、日本語及び多言語（９言語）で和歌山の庭園を紹介するウェブサイトを開設。

２．2021 年度

① 2021 年６月　旅行記事の掲載

和歌山の庭園周遊観光を紹介する旅行記事（日本語・英語）を関西観光本部公式サイト「The KANSAI Guide」に掲載。

② 2021 年６月　ＰＲ用写真素材の制作

庭園周遊観光のＰＲのため、観光パンフレットやＳＮＳでのプロモーションなどに使用する写真素材を制作。

③ 2021 年８月　庭園記事の掲載

日本政府観光局（JNTO）グローバルサイト内特設サイト「Japan's Local Treasures」に「高野山の庭園」の記事を掲載。

④ 2021 年 10 月　観光パンフレット（日本語版）の制作・配布

庭園に関心の薄い層にも庭園の魅力を伝え、幅広い層に庭園周遊観光を促す観光パンフレットを制作。

（２）今後の取組

１．情報発信

（１）メディア招へい

国内外のメディアを招へいし、庭園を中心に食文化や体験プログラムなどを取り入れた周遊観光に関する情報を発信する。

（２）旅行エージェント招へい

国内外の旅行エージェントを招へいし、庭園を中心に食文化や体験プログラムなどを取り入れた旅行商品の造成を図る。

（３）観光パンフレット（多言語）の制作・配布

インバウンド回復期に向けて、外国人観光客に庭園というこれまでとは異なる角度から和歌山の魅力を訴求し、庭園周遊観光を促す観光パンフレットを制作する。

（４）ウェブサイト運営

2021 年度に開設した、日本語及び多言語（９言語）で和歌山の庭園を紹介するウェブサイトを活用して、和歌山の庭園の魅力を発信する。

（５）文化ストーリー制作

インバウンドを念頭に置き、外国人目線で庭園周遊観光に関する文化ストーリー（日本語・英語）を関西観光本部と連携して制作する。

２．イベント

（１）庭園をテーマとするイベント

庭園をテーマに、写真教室やガイドツアーなどのイベントを開催する。また、地域のコミュニティーを対象とした勉強会を開催し、地域における庭園への理解を深めることで、訪問者に対するおもてなしと景観や文化財の保全に関する意識の向上を図る。

（２）既存の取り組みで、今後も継続するイベント

①和歌山城公園桜まつり
②和歌山城納涼ナイター
③和歌山城公園菊花展
④新春初登閣　天守閣で初日の出を
⑤紀州根来寺かくばん祭り
⑥粉河とうろう祭

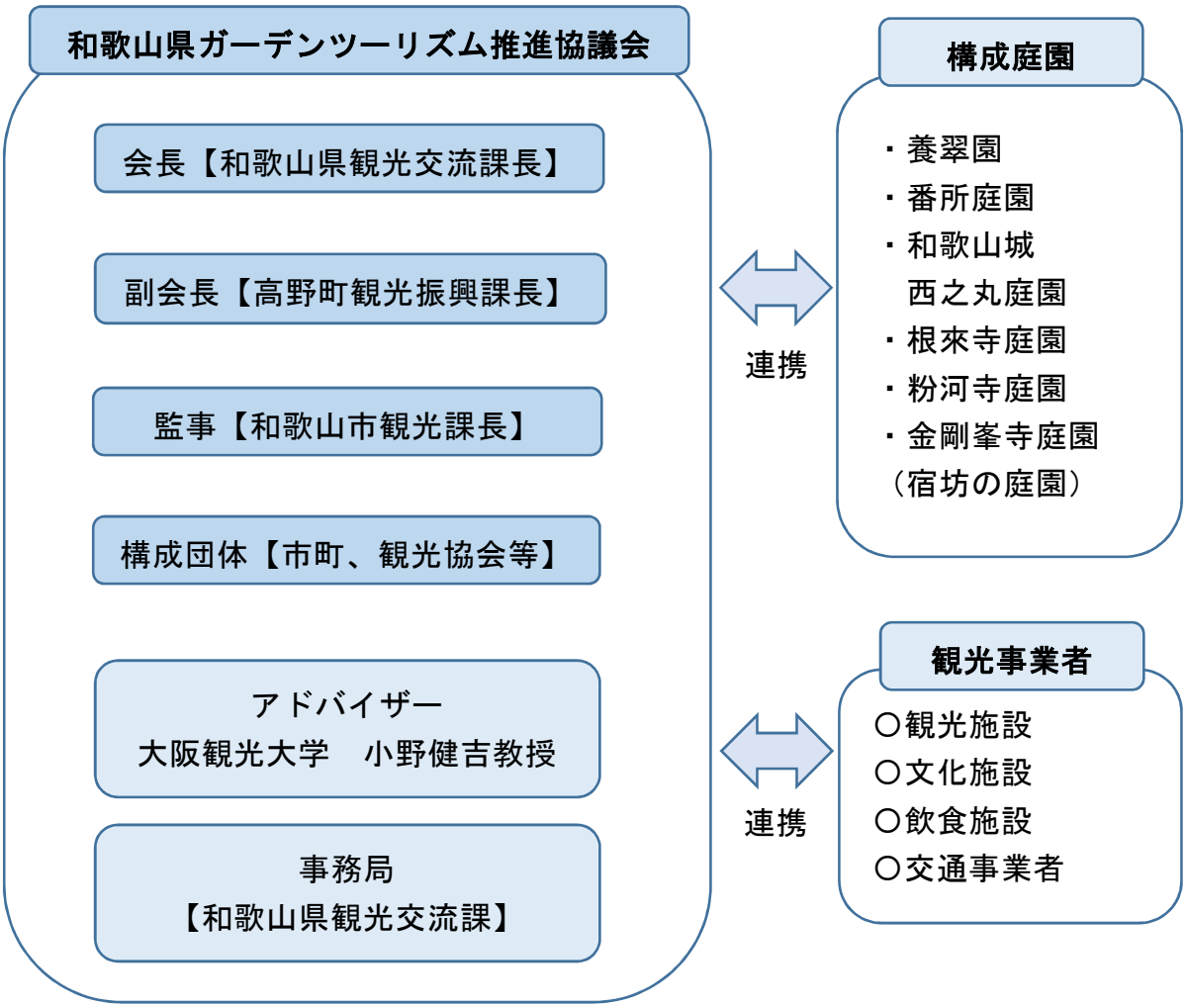
（３）協議会の構成員

【自治体】
和歌山県、和歌山市、岩出市、紀の川市、高野町

【観光協会・DMO】
公益社団法人和歌山県観光連盟、一般社団法人和歌山市観光協会
岩出市観光協会、紀の川市観光協会、一般社団法人紀の川フルーツ観光局
一般社団法人高野町観光協会、一般社団法人高野山宿坊協会

（協議会の規約は別途添付）

（４）事業の実施体制



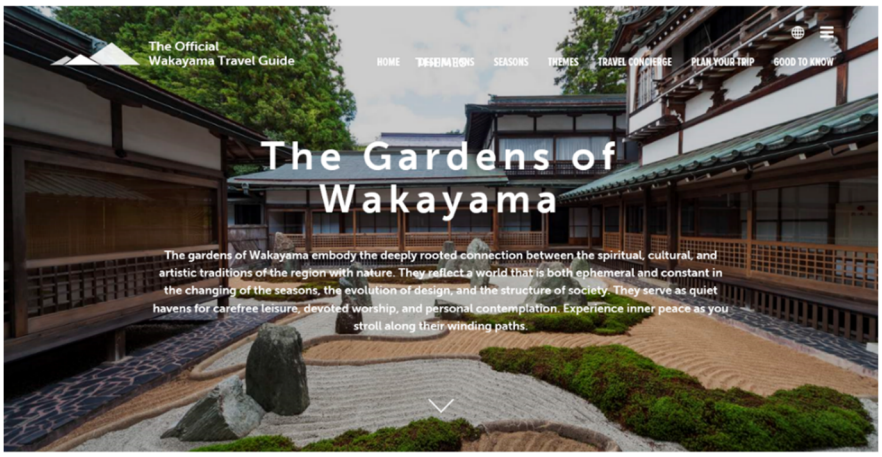
（５）具体的な事業	様式１－９のとおり

※　複数ページにわたっても良い。

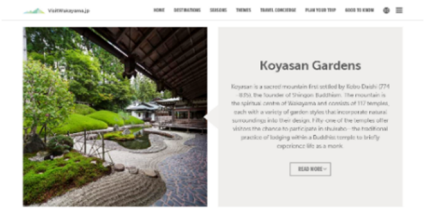
（様式１－９）

具体的な事業一覧表

<table>
<tr><td>事業名①</td><td colspan="3">ウェブサイトの運営</td></tr>
<tr><td>実施主体</td><td>和歌山県ガーデンツーリズム推進協議会</td><td>事業期間</td><td>2020　年度　～　2026　年度</td></tr>
<tr><td>実施施設</td><td colspan="3">構成庭園</td></tr>
<tr><td>事業概要</td><td colspan="3">2020 年度に開設した、日本語及び多言語（９言語）で和歌山の庭園を紹介するウェブサイトを利用して、和歌山の庭園に関する情報を発信し、国内外での認知度向上を図る。また、和歌山県における庭園周遊観光の魅力がより伝わるようアップデートするなど工夫していく。

言語：日本語、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語
中国語（繁体字、簡体字）、韓国語、インドネシア語、タイ語
＜英語版＞
 

https://en.visitwakayama.jp/themes/garden-tourism/

＜日本語版＞

https://www.wakayama-kanko.or.jp/features/garden-tourism/</td></tr>
</table>

事業名②	メディア招へい		
実施主体	和歌山県ガーデンツーリズム推進協議会	事業期間	2021　年度　～　2026　年度
実施施設	構成庭園及び周辺観光施設		
事業概要	国内外のメディアを招へいして、庭園を中心に食文化や体験プログラムなどを取り入れたファムトリップを実施する。紙媒体やオンライン媒体に和歌山の庭園を周遊する旅行記事を掲載することで、国内外での認知度向上と誘客を図る。 ＜取材イメージ＞ 		

事業名③	旅行エージェント招へい		
実施主体	和歌山県ガーデンツーリズム推進協議会	事業期間	2021　年度　～　2026　年度
実施施設	構成庭園及び周辺観光施設		
事業概要	国内外の旅行エージェントを招へいして、庭園を中心に食文化や体験プログラムなどを取り入れたファムトリップを実施する、庭園周遊の魅力や周遊するにあたっての移動手段などについて現地で説明し、旅行商品の造成を促進し、和歌山への送客数増加を図る。 ＜取材イメージ＞ 		

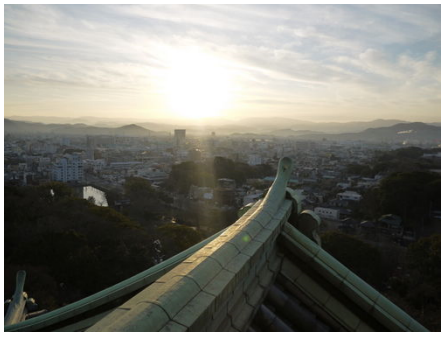
事業名④	観光パンフレット（多言語）の制作・配布		
実施主体	和歌山県ガーデンツーリズム推進協議会	事業期間	2021　年度　～　2026　年度
実施施設	構成庭園及び周辺観光施設		
事業概要	インバウンド回復期に向けて、外国人観光客に対し庭園というこれまでとは異なる角度から和歌山の魅力を訴求し誘客につなげるため、外国人目線で庭園周遊観光を促す多言語観光パンフレットを制作する。 ＜パンフレットイメージ＞ ※画像は日本語版 パンフレット		

事業名⑤	庭園イベント		
実施主体	和歌山県ガーデンツーリズム推進協議会	事業期間	2021　年度　～　2026　年度
実施施設	構成庭園及び周辺観光施設		
事業概要	庭園をテーマに、プロの写真家による写真教室や、庭園の専門家や語り部などによるガイドツアーなどのイベントを開催する。 観光客や市民に庭園に親しんでもらうとともに、イベント参加者によるＳＮＳ上での和歌山の庭園の魅力の拡散を促す。 また、地域のコミュニティーを対象とした勉強会を開催し、地域における庭園への理解を深めることで、訪問者に対するおもてなしと保全に関する意識の向上を図る。		

事業名⑥	和歌山城公園桜まつり		
実施主体	和歌山市	事業期間	1976　年度　～　　年度
実施施設	和歌山城		
事業概要	桜の名所である和歌山城公園では、約 600 本のソメイヨシノが咲き誇り、白亜の天守や江戸時代から残る数多の石垣と相まって大変見応えがある。また期間中は夜桜見物用のボンボリ・提灯が灯り、より一層の趣が添えられる。 		

事業名⑦	和歌山城納涼ナイター		
実施主体	和歌山市	事業期間	1959　年度　～　　年度
実施施設	和歌山城		
事業概要	和歌山城では７月中旬から８月末日まで天守閣の営業時間を夜間まで延長し、和歌山城納涼ナイターを開催している。夜風にあたりながら眺める天守からの展は大変美しく、和歌山港まつり花火大会の日にも天守閣からの夜景が楽しめる。 		

事業名⑧	和歌山城公園菊花展		
実施主体	和歌山市	事業期間	1957　年度　～　年度
実施施設	和歌山城		
事業概要	和歌山城公園では毎年大小色とりどりの菊花を一堂に集めた菊花展を開催している。けんらん豪華な菊花の美しさを感じられるだけでなく、即売会や菊作り相談コーナーも設けられ、秋の憩いを楽しんで頂ける。 		

事業名⑨	新春初登閣 天守閣で初日の出を		
実施主体	和歌山市	事業期間	1983　年度　～　年度
実施施設	和歌山城		
事業概要	和歌山城では、元旦早朝から天守閣を無料開放し、店主からのご来光を拝んでいただいて新春をお祝いしている。特に先着 1,000 名様には、その年の初登閣を記した記念品（かわらけ）をお配りしている。 		

<table>
<tr><td>事業名⑩</td><td colspan="3">紀州根来寺かくばん祭り</td></tr>
<tr><td>実施主体</td><td>紀州根来寺かくばん祭り実行委員会（岩出市観光協会）</td><td>事業期間</td><td>1997　年度　～　　年度</td></tr>
<tr><td>実施施設</td><td colspan="3">根來寺境内　ほか</td></tr>
<tr><td>事業概要</td><td colspan="3">　根來寺境内にて舞台等を設置し、伝統芸能や根来鉄砲隊の演武等を披露する。
　また、根來寺庭園巡りとして、名勝庭園を見学し、庭園を眺めながらお茶を頂くイベントを同時開催する。

 </td></tr>
</table>

事業名⑪	粉河とうろう祭		
実施主体	粉河とうろう祭実行委員会	事業期間	2009　年度　～　　年度
実施施設	粉河寺・十禅律院		
事業概要	粉河寺境内に約 1,500 個の灯籠を灯し、中学生の発表会やコンサートなども行い、秋の夕べをゆったり楽しんでいただくイベント。 かつて補陀落山施音教寺といわれた時期もある粉河寺の本堂前に、補陀落渡海に見立てた青海波の形に灯籠が配置されるのがみどころ。 （街中で実施していたイベントを、2021 年から粉河寺境内で実施。 新型コロナウイルス感染症の影響で、2021 年は無観客で実施。） 青海波の形に配置された灯籠 灯籠は地域の中学生が制作した		